１５年度「ＮＩＥで磨く国語力」№７

年　組　番　氏名

「星の王子さま」の（１）サンテグジュペリが言ったそうだ。〈（２）完璧が達せられるのは、付け加えるものが何もなくなった時ではなく、削るものが何もなくなった時である〉。『名言の森』という本から引いたが、芸術論としても人生論としても深みがある▼通じるものがあろう、①ナ（亡）くなった詩人の長田弘さんはこう書いていた。〈一人の日々を深くするものがあるなら、それは、どれだけ少ない言葉でやってゆけるかで、どれだけ多くの言葉でではない〉。詩でも散文でも簡潔な美しさは際だっていた▼秘密をご本人が「言葉のダシのとりかた」と題する詩に残している。〈かつおぶしじゃない／まず言葉を選ぶ／……はじめに言葉の表面の／カビをたわしでさっぱり落とす〉▼〈Ａそして　〉〈血合いの黒い部分から／言葉を正しく削ってゆく／言葉が透きとおってくるまで削る〉。そのあと②ナベ（鍋　）を火にかけ、言葉の意味を沈めて、③沸騰（ふっとう）寸前サッと④掬（すく）い取り、黙って⑤漉（こ）しとる―▼そうやって⑥抽出（ちゅうしゅつ）された詩と文には、はっとする一行がいつも静かにたたずんでいた。たとえば、〈（３）立ちどまらなければ／ゆけない場所がある〉。ぜい肉をそぎ切った言葉の数々は、⑦冗舌（じょうぜつ）と⑧喧噪（けんそう）にまみれた心身に、（４）滋味となって染みてきたものだ▼長田さんの詩句を、小欄も何度かお借りした。震災の痛手が⑨イ（癒　）えぬ故郷、福島を案じながらの旅立ちではなかったか。享年７５。日常というものを生みだす時間と場所を、生涯をかけて⑩慈（いつく）しんだ人が、静かにペンを置いた。

〔２０１５年５月１２日「天声人語」〕

問一　①～⑩のカタカナ部は漢字に直し、傍線部は読みを答えなさい。

問二　傍線部（１）の作品の記号を○で囲もう。

ア　『博物誌』　㋑　『夜間飛行』　ウ　『狭き門』　エ　『戦争と平和』

問三　傍線部（２）の内容に反する選択肢の記号を○で囲もう。

ア　完璧を妨げるのは余計なものだ。　イ　完璧さには簡潔な美しさがある。

㋒　余計なものこそが完璧の本質だ。　エ　完璧な作品から削れるものはない。

問四　次の各詩人に関連の深いものを語群から選び（　）に記号を書き入れよう。

・長田　弘（Ａ　）・黒田三郎（Ｄ　）・田村隆一（Ｂ　）・川崎　洋（Ｃ　）

〔語群〕Ａ『抒情の変革』Ｂ『荒地』結成　Ｃ『櫂』創刊　Ｄ『ひとりの女に』

問五　〈Ａ〉にあてはまる言葉を次から選び、書き入れよう。

・しかし　・つまり　・また　・そして

問六　傍線部（３）について次の〈Ｂ〉〈Ｃ〉に答えよう。

〈Ｂ〉「はっとさせる」のはなぜか、３０字程度で解説してみよう。

〔答例〕（「行くためには止まってはならない」との先入観を砕かれるから。）

〈Ｃ〉具体例をいくつか考えてみよう。

〔答例〕（エレベーターで移動する階　・坐禅で得られる悟りの境地　）

問七　傍線部（４）「滋味」の意味を次のようにしたとき（　）に入る漢字一字を書き入れよう。※その漢字は本文中にも使われている。

・ゆっくり味わうと分かる（深　）い味（印象）。